

老人医療NEWS



老人の専門医療を考える会会長
青梅慶友病院院長
大塚 宣夫

大往生の実現

大塚 宣夫

発行日 平成12年7月31日
発行所 老人の専門医療を
考える会
〒160-0022東京都新宿区新宿1-1-7
コスモ新宿御苑ビル9F
TEL.03(3355)3020
FAX.03(3355)3633
発行者 大塚宣夫

り、増加するとも思えない。となれば、もう少し、現実的な最期の形を模索した方がよい。最近余りきか

わが国には、昔から「大往生」という言葉があり、この中にこそ、現代人の不安を解消する鍵があるように思えてならない。

私なりに解釈すれば、①ある程度長生きし、周囲への責任を果たし終えてること。②周囲に、特に自分の家族や親しい人々に迷惑をかけず、惜しまれながら逝くこと。③最期が穏やかで、見苦しい姿ではないこと。等の条件が挙げられようか。

私達の対象としている要介護者の大部分は、①の長生きはクリアしているものの、②の条件となるとなかなか難しい。要介護状態が長期化すると、家族による介護の負担感は、する側、受ける側の双方で飛躍的に増す。介護には、かなりの量の専門的な知識と技術、それにしっかりし

た仕組みが不可欠であり、それにハートが加わって初めて成果があがるのであって、ハートだけの素人芸では不十分であるばかりか、時として余計な苦勞、苦痛を招来することにもなる。

従って、②の条件を解決しようとするれば、基本部分はすぐれたプロの集団に委ね、家族は主に精神的にサポートする。つまり、「介護はプロに、家族は愛を」ということではなからうか。

③の穏やかな、見苦しくない最期というのは医療技術の発達、普及と共に、かえって実現が難しくなってきた。人生の最期の部分を切り離して、医療の専門家に委ねるとすれば、最善の努力とは、技術と知識を駆使してのチューブづけにならざるを得ないのである。その人の最晩年を輝かしいものにしようという一連の流れでとらえてこそ、穏やかな、そして余韻のある臨終を迎えられるのである。このように考えてくると、私達のやることははっきり見えてこよう。

戦後五〇年間、わが国民は、一貫して豊かな生活を求め、その成果の一つとして、世界一の長寿国にもなった。しかし、その先にあるものも云えば、寝たきりやボケといった他人の助けなくしては、生きられない状態であったり、沢山のチューブにつながれ、延々と生かし続けられる姿に代表して語られることが多い。つまり、自分の人生の終りの形がな

かなか見えにくいゆえに、不安な部分のみが、増幅されるという構図が出来つつあると云ってよい。しかれば、人は、どんな形の最期を望むのであろうか。年をとっても他人の世話にならず、気ままに暮らし、ある日ポックリが願いであると云っても、現実には、それはほんの少数派にすぎないし、今後も積極的安楽死でも認めない限



当施設のホールの喫茶コーナーで患者様とご一緒していたときに、大学生の頃、いろいろな方にコーヒーに関する蘊蓄を教えていただいたことを思い出したので書いてみます。

実が熟さない内に機械で刈り取り、水圧で豆を分離、強制乾燥してしますが、昔ながらの方法で人の手で熟した実から豆をとり、自然乾燥させているところもあります。

①豆の種類

ブラジル、キリマンジャロ、ハワイアン・コナのように生産地で分けられていることが多く、産地による特徴があります。しかし、ブルーマウンテンパウリスタなどはブラジルのパウリスタ地方で栽培され、本来のブルーマウンテンとかなり感じの違う味になっているものもあります。また、ビーペリなどのように、良質の豆だけを選び出したものもあります。

これは昔の収穫・乾燥法での話です。現在の水洗・強制乾燥法では、芯が乾いておらず、焙煎直後は味が安定せず、数日置いた方がおいしいといわれます。

焙煎は煎る深さにより、アメリカン、フレンチ、イタリアンなどに分けられ、深煎りのイタリアンコーストが一番カフェインが多いと思われるています。本当はフレンチコーストのカフェインが一番多く、アメリカンではまだカフェインが十分出でておらず、逆にイタリアンでは炭化しているため少ない状態です。また、この炭化の味が苦みです。実はコーヒ

②豆の収穫法・乾燥・焙煎法

赤い実の中にコーヒーがあります。が、ブラジルなどの大量生産地では

自身の味は苦みではなく、甘味と酸味です。

③挽き方

挽き方はすりつぶしと切り刻みの二つに分かれ、それぞれの機械がグラインドミルとカットミルです。家庭用の手回しミルはグラインドミルで、電動ミルはカットミルです。挽くとき大切なことはシルバースキンの処理です。シルバースキンとは、コーヒー豆の縦の割れ目まで巻き込んでいる渋皮で、混ざりやすいのですが、カットミルでは静電気と風圧でかなり除去されます。

④点て方

同じ豆でも点て方によりかなり味が異なり、こだわられる方が多いところでは、点て方としてペーパーやネルドリップ、パーコレータ、サイホン、エスプレッソなど数え切れないほどの道具がありますが、豆の蒸らし、温度、速度などが味に大きく影響します。一般的に蒸らす時間が短いと、まろやかさがなく、尖った味になると言われます。ゆっくりと蒸らすため、ポットの湯の注ぎ線

ジン社のポットしか使わない人もいます。また、ペーパードリップでは一つ穴と三つ穴があり、前者の方が蒸らす時間が長いとこだわる方もいます（メリタ社とカリタ社の違い）。また、エスプレッソなどの高温での抽出法ではシルバースキンによる渋みがやすく、渋皮の処理をいっそう気をつける必要があります。いろいろな方法はありますが、ネルドリップで五人分前後を点てるのが一番簡単にまろやかな味になるようです。

特殊な点て方として水だし法（ダッチコーヒー）があります。点滴式に時間をかけて水をポタポタと注ぎ抽出する方法と、水と豆を混ぜ合わせ数時間置いた後に一気に濾し出す方法があります。熱処理をしていないため豆独特の甘い香りが抽出液に移るため、アイスで飲まれることを勧めます。

学生時代のこだわりを思い出しながら少し書いてみましたが、実は今一番愛飲しているのは自販機の缶コーヒーです。

高齢者医療制度 の課題

四月の診療報酬改定も介護保険制度施行からも四カ月を迎え、表面的にはおちつきを取りもどしている。

総選挙後の組閣もすんだが、どうもスッキリしない。それは、医療保険制度改革のスケジュールがみえないことが原因である。

負担増は選挙にマイナスというところで、与党は医療保険制度改革をあっさり見送ってしまったし、高齢者の介護保険料を六カ月間徴収しない方針を示した。これは、政治の世界の話であるが、高齢者医療現場は混乱した。確か、四月一日からは、医療も介護も一割の負担と厚生省は主張してきたし、「医療と介護の整合性に配慮する」という発言もあったように思う。

その結果、病院のことはともかく、訪問看護ステーションでは、変なことになっている。難病などの高齢者

が医療保険の場合には、一日二五〇円で、看護婦の交通費も請求できるが、介護保険になると、三〇分未満でも四二五円、一時間以上一時間半未満だと一、一九八円になる。その他、地域加算、夜間、早朝訪問、二四時間対応など、まったく整合性がない。

医療保険と介護保険は、まったく別の制度だとして、ステーションも利用者も大混乱したことは確か事実である。政治、行政の世界は、わからないことが多いが、現場の混乱を最小限にするという姿勢は、まったく感じられない。

同じような話だが、昨年来の介護保険制度の混乱は、実はおさまっていないのではないだろうか。たとえば、短期入所の利用に対する厚生省の対応をみるとわかる。短期入所は区分限度支給額内で六カ月以内の利用日数の上限があるのみであった。昨年末に、特養関係者から利用日数の拡大が求められると、訪問通所系から振り替えてもよいことになったが、それでも、短期入所の利用者が減少するのではないかといわれて

いた。実際、四月になってから、短期入所の利用者は、特養で七〇%、老健施設が四〇%程度減少した。あわてたのは、施設側だけではなく厚生省も対応せざるをえなくなった。どうなるかはこれからだが、訪問通所系を合わせて、利用者の居宅サービスの利用頻度は、それほど高くなく、何らかの対応をしないと、秋からの介護保険料の本格徴収にも問題をなげかけることになる。

問題は、厚生行政自体が、何か政治的圧力をかけられると右往左往しているように思えてならないことである。我々、医療を提供する側にある者は、制度改革に対応するために時間が必要であり、一度決定したことが、簡単に変更されると、大変困難な状況に陥ってしまうことさえある。

高齢者医療制度では、医療保険に残った療養型病床群等の定額医療のあり方と、定額にならない一般医療における高齢者医療の問題を整理する必要はある。どのような制度改革をするかという以前に、検討課題を示し、利用者や提供者の意見を集約

する一層の努力が必要だと思う。なぜならば、選挙後はただちに医療費抑制に向かうというようなことになり、老人専門医療の質の経済的裏付けがあやふやになってしまうことを恐れるからである。

それとともに、高齢者医療制度は、まぎれもなく医療制度の一部である以上、医療全体の二一世紀のあり方の中で、慎重に検討されるべきだと思う。少なくとも、薬剤使用方法や検査などには、何らかのガイドラインが必要であるとともに、療養環境にも一定以上の最適基準の設定が必要であろう。昭和五〇年代後半の医療費抑制策のように「安ければよい」という一方的な抑制ではなく、医療のあり方を踏まえた科学的で合理的な医療費の適正化と質の確保向上という原則を再認識すべきだろう。

※へんしゅう後記※

叔母が脳出血で倒れ、家族の生活は一度に崩れた。いざこのような状況になると当面の問題に家族は困惑し、その体勢を立て直すのに時間がかかる。人として死をどのように迎えるかが最後の一大仕事となろう。